

まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (21)

行方地方 (下)

行方四頭と行方の里



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (21)

行方地方 (下)

行方四頭と行方の里

木村 進

ふるさと“風”の会

(1) 行方四頭

関東平家の直系である「常陸大掾(だいじょう)氏」の多氣大掾氏四代目の平致幹(むねもと)の弟である平清幹は水戸に進出していたが、清幹には三子があり、長男盛幹は吉田太郎、次男忠幹は行方次郎、三男成幹は鹿島三郎となり吉田氏・行方氏・鹿島氏となった。

この吉田氏は水戸を本拠地にして多氣大掾が滅びた時に大掾を受け継ぎ常陸大掾氏を継承した。そして国府のあった石岡(府中)にも城を築いて二つの城を行き来していたが、水戸を奪われると佐竹氏に敗れるまで石岡(府中)がその根拠地となった。

一方、この次男忠幹(行方氏始祖)の子景幹が地頭職に任じられ、行方地方で勢力を拡大し開拓していった。

しかし、このあちこちには鹿島の神宮の領地もあり、争いも頻繁に起こっていた。この景幹には4人の息子がおり、小高氏(行方氏)・島崎氏・麻生氏・玉造氏になっていった。

このうち、長男為幹は行方氏の惣領を継ぎ、のちに、小高へ築城して移動したので、小高氏を称するようになった

これら四家は「行方四頭」と呼ばれ、長男の小高氏を総領として、三氏がこれを補佐する体制が初期のうちには確立しており、行方郡の中心的存在となっていた。それぞれの勢力地は西から玉造氏(玉造)、小高氏(小高)、麻生氏(麻生)、島崎氏(牛堀)となった。このため西からの防御には玉造氏が当たることになった。

戦国時代になると常陸大掾家の勢力が弱くなり、行方四家は自家の勢力を伸ばすため互いに争うようになっていった。

しかし、麻生氏17代常安は、東に領地を接する同族の島崎氏と対立、島崎義幹と戦闘状態となり麻生城は落城(天正12年(1584年))、麻生氏は滅んだ。

一方東端の島崎氏は大永 5 年（1525）、忠幹の子利幹は鹿島氏を攻め、鹿島郡をほぼ領有し、天文 5 年（1536）には玉造宗幹を攻め、行方郡を一時ほぼ制圧した。天正 12 年（1584）に麻生城を攻略し、里見義弘の弟義政を井関氏と改めて城主とした。同十七年には小高城を攻めて坂氏兄弟を戦死させた。

その後、島崎氏も常陸国を統一した佐竹氏に忙殺され行方四頭はすべて滅んでしまった。

歴史的な流れは概ね上記のようになるが、最初は兄弟力を合わせていたようだが、何代か経つとお互いが争うようにもなり複雑に絡み合っているのが理解するのが難しい。

ここでは、それぞれの地を散策してみて気が付いたことなどを以下に順を追って述べたいと思います。

(2) 小高の地に行く

(2-1) 小高城跡

茨城県行方（なめがた）市は麻生町、玉造町と北浦町が合併して霞ヶ浦の北岸沿いと北浦の西側地域が入ります。今回紹介しようとしている「小高」という地域で、旧麻生町の玉造町側に近い、ちょうど中間くらいの場所にあたります。

常陸国風土記の記述から紹介しましょう。

「郡より南へ七里のところ、男高（をだか）の里がある。昔、この地に住んでゐた小高（をだか）といふ名の佐伯に因んで名付けられた。常陸国守、当麻（たぎま）大夫の時代に池が作られ、それは今も道の東にある。池より西の山には、草木が繁り、猪や猿が多く住んでゐる。池の南の鯨岡は、古へに、鯨がここまではらばって来てそのまま伏せて息絶えた場所である。池の北には、香取の神を分祀した社がある。栗家（くりや）の池といひ、大きな栗の木があったことから、池の名となった。」

（口訳・常陸国風土記）

原文：「郡南七里男高里 古有佐伯小高 為其居処因名 国宰当麻大夫時所築池 今存路東 自池西山猪猿大住艸木多密 南有鯨岡 上古之時海鯨匍 = 而来所臥 即有栗家池 為其栗大 以為池名 北有香取神子之社也」

なぜ原文を載せたのかと言うと「常陸国守 当麻大夫」が「国宰当麻大夫」と書かれているためだ。

国司のことを国宰（くにのみこともち）と書かれているので、7世紀前半くらいのことで、風土記が書かれる100年程前（今から1400年くらい前）の話のようです。

小高という名前の始まりは、小高（をだか）といふ名の佐伯に因んでつけられたと書かれていますが、この佐伯は大和朝廷が来る前にこの地に住んでいた部族で、「朝廷に従わないさえぎる人々」というような意味合いを持っています。

こんな古い話は散策してもあまり収穫はないのでまずは戦国時代あたり前後の様子を見てみたいと思います。

さて、まずはここに戦国末期まであった「小高城」の跡を訪ねました。



今は特に何もない畑や山の中にその遺構が残されているのですが、ここに書かれている薄れた看板がなければこの場所を見ても昔ここに城があったとはわからないでしょう。

行方四頭（行方、島崎、麻生、玉造）の長男行方（なめかた）氏（行方太郎）が小高に城をかまえて「小高氏」（長男であるので小高太郎ともいう）となった。そう考えるとこの小高が行方郡の中心となったのだろうか。でも今はまったくその姿をうかがい知ることは出来ない。

この小高氏も佐竹氏が府中（石岡）の名家大掾氏を滅ぼした後、常陸太田に呼び集められ殺されてしまった大掾一族 33 館の一人である。

どんなことがあったのだろうか。

佐竹氏も秀吉から常陸国を任されたとはいえ、これらの 33 館もの城主たちも呼び出されてもみな疑心暗鬼になっていたに違いない。

それなのに皆殺されたというのは毒殺なのか？



内御城（うちみじょう）と呼ばれた辺りだろうか、城の中心だろう。山の中に畑が広がる。エシャレットが栽培されているとか。

この城跡から廻りを少し眺めていきたい。行方四頭は結構複雑で理解するには時間がかかりそうだ。

でも書かれているものを読むより現地で感じたものから理解を広げた方が頭に入りやすいようにも思う。

地図では道が良く分からないが、国道 50 号線の「小高」の信号をほんの少し石岡側に進んだところにある左に入る道を進めばその道が左に曲がる曲がり角に案内板が立っている。

(2-2) 小高のカヤ

小高城跡から 700m程行ったところに「小高のカヤ」という大木がある。

市の説明によれば

「県指定天然記念物

小高地区にある常緑の大木。樹齢約 650 年、幹回り 6メートル。

旧小高小学校の敷地であり、その昔は、天台宗神宮寺の境内といわれていました。」となっています。



木のある敷地は上の写真のような門が残っていました。

これは説明にあるように「小高小学校」がここにあったようです。

行方市となる前は麻生町でした。この小高小学校も最近廃校になってしまいました。場所は少し南の方の側鷹神社の近くです。

カヤの木のあった場所から一旦別な場所に移り、その後この側鷹神社脇に